

じょうきょうじ

浄敬寺だより



発行日 平成二十九年一月一日 第二十八号

【法語】

弥陀の光明は、たとえば、
ぬれた物をほすに、うえよりひて、
下までひるごとくなる事なり。
是は、日の力なり。
決定の心おこるは、これすなわち、
他力の御所作なり。
罪障は、悉く、弥陀の御けしあることなる。

蓮如上人御一代記聞書 二〇九

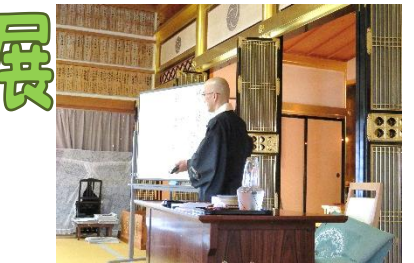
【意識】

弥陀の光明は、たとえるならば、濡れた物を干すのに、
表から乾いて、裏まで乾くようなものです。
これは、日光の力です。
罪深い凡夫にたしかかな信心がおこるのは、
弥陀のおはたらきによるものです。これによって、
凡夫の罪はことごとく、弥陀の光明が消してくださる
のです。

2016 年後半写真展



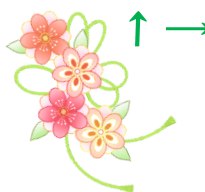
年末法話会 ↑ ↓



歎異抄をよむ会
特別講座 ↓ ↑



しまい講



← 有縁講



音市場

☆巻頭法話『年頭にあたり』☆

御門徒の皆様、明けましておめでとうございませう。この寺報の巻頭文を書きながら、新しい年がどんな年になるのだろうかと思いをめぐらしています。市役所での勤めを辞め、寺に専従してから早や七回目の正月となりました。この間、寺での勤めは勿論ですが、地域の真宗寺院の組織（三条教区第十組）の副組長、そして組長（そちよう）の役目を仰せつかり、多くの方々の協力も頂きながら、何とかこの三月で任期を終えるとところまで辿り着きました。四月からは少し肩の荷を降ろして寺の仕事に専念出来るかなと思っております。今度は民生委員という大役を引き受けてしまいました。既に保護司の仕事も十年以上続けていますので、私には荷が勝ち過ぎていく気がしています。が、以前どなたかが「仕事は頼まれるうちが・・・」というようなことを言っておられた記憶があり、それでもあろうかと気力を振り絞っているところなんです。しかし、さすがに最近は何も忘れも無く、毎日何か探し物をしていて自分が情けなくなっています。万が一にもお願いされた仏事だけは決して忘れてはならないと自分に言い聞かせているところなんです。

昨年暮に、「浄敬寺同朋の会」を本山に登録させていただけました。「同朋」とは志を同じくする友ということ

とです。親鸞聖人のお手紙を集めた『末燈鈔』や、門弟に話されたことが記録されている『歎異抄』に、同朋・同行という言葉が使われています。また、蓮如上人は『御文』に、「聖人は御同朋・御同行とこそ かしずきて おおせられけり」と書きしるしておられます。本山でも昭和三十六年に親鸞聖人七百回御遠忌が勤まったことを機に、翌年昭和三十七年から僧俗超えて共に如来の教法に学び、目覚めていこうという「同朋会運動」が提唱されました。浄敬寺では、従来から法話会等で、「浄敬寺同朋の会」という言葉を使ってきましたが、このたび正式に本山に登録した次第です。特定の人だけではなく、浄敬寺門徒の全てが同朋会員とさせていただきます。機会ありますが、特別な責務も負担もありません。機会あるごとに共に仏様の教えに聞いていきましようという趣旨ですので、今までに増して機会あるごとに寺に足を運んでいただき仏法に出逢っていただきたいと願っています。

さて、昨年十月には三条教区第十組の推進員養成講座（真宗講座）が終了し、浄敬寺からも三人の方から受講いただきました。約一年がかりの長丁場でしたが、最後に京都の本山で帰敬式を受式し、法名をいただきました。法名は一般的に亡くなってから住職につけてもらうというイメージが多いと思いますが、本来は生前にいただくというのが正式です。浄敬寺は現在二十

名の推進員がおられ、法話会や寺の行事等に積極的に御参加いただき、聞法いただいています。「浄敬寺同朋の会」にも役員として関っていただきますが、この真宗講座は三年に一度開講されるものです。次回も是非ともご縁のある方の受講をお願いしたいと願っています。「いのち」が見失われている殺伐とした現代ですが、仏法聴聞を通して是非ともいのち輝く日々を送らせていただきたいものです。本年もよろしくお願いいたします。

合掌

（住職）

☆庫裡便り（坊守）

◎境内の木々

境内の大きな榎と松は樹齢四・五百年で、浄敬寺の大切なシンボルです。夏には大きな涼しい日陰ができ、気持ちの良い風が吹き、木の下は最高の場所です。秋の榎の落葉は今年も九十リットルの袋に十五袋程集まり、二回に分けて知り合いのお寺さんが福島に運んでくださいました。さて、悩みは松の葉、昔は貴重な燃料だったそうですが、今は集めてクリーンセンターに運んでいます。剪定してもらおうと松の木が弱ってしまうかも知れないし、涼しい日陰が無くなるし、「どうしたもんじやるのー」と松の木を眺める日々です。



◎補修いたします

肩衣の紐の部分がほつれた方や、お念珠の紐がこわれた方は、補修いたしますのでお声かけください。

◎二女・千晶のこと

十月一日 新潟産業大学父母の会主催で二女千晶の講演会が同大学であり、沢山の方から足を運んでいただき、ありがとうございます。応援してくださる沢山の方がいたことを知り、また、親も知らない苦労話など改めて娘の強い意志に気づかされたことでした。皆様の応援に感謝しながら温かく見守っていききたいと思えます。

二月には東京吉祥寺シアターでギリシャ悲劇『アトレウス』の演劇に出演予定ということで楽しみにしています。

☆二〇一六年後半を振り返って

◎秋彼岸（お中日九月二十二日）法話 住職

私たちは思い通りにならない「いのち」を生きていながら、実際は自分の思い通りにするのが人生の目的だと信じています。そこに人間の闇がある。その闇を自覚した時に本当の人間としての世界が開けてくるのです。そういった意味で、後半には大きなハンデを背負いながらも大きな喜びの人生を生きた女性で、日本のヘレンケラーと言われた中村久子さんの生涯を描いたビデオを鑑賞しました。

◎三条別院報恩講お取り越し 団参（十一月八日）

十組の団体参拝には、浄敬寺からも沢山の方からご参加いただき、結願日中をお参りし、寺本温師の御法話を聴聞しました。

別院にておときをいただいた後は、柏崎への道中に寺泊の鮮魚センターや当院の勤務する出雲崎町の良寛記念館を見学し、にぎやかで充実の日帰りツアーでした。良寛記念館では、真宗門徒とも三条別院とも交流の深かったといわれる良寛様について、当院から解説がありました。

報恩講期間中は、住職・坊守・准坊守それぞれ、内陣・外陣・合唱団等々、法要に参勤いたしました。初日の音楽法要には、坊守と浄敬寺御門徒四名の方から合唱団としてご参加いただきました。

◎赤倉有縁講 団参（十一月十四〜十五日）

今年も赤倉ホテルの有縁講に五人で参加しました。講師は今泉温資先生で、親鸞聖人の遺徳の話を沢山聞かせていただきました。長野の善光寺にも越後から関東への旅の途中で立ち寄られ、如来様の御前に松を供えられたと伝えられています。この古事に習い、今も欠かさず松の若木が供えられています。

正面向かって左側に松を持った聖人様の石像があります。善光寺参拝の際はこちらもお参りください。（坊守 記）

◎しまい講（十一月二十七日）法話 住職

浄敬寺ではおときを準備し、法話や勤行に遇っていただく「お講」形式の行事が年に五〜六回ありますが、その締め括りがしまい講です。台所のお当番の下原地区の方、多くのお参りの御門徒の皆様のお陰で無事最後のお講をお勤めする事ができました。

お釈迦様の「薬にならない草はない、どんな草でも薬になる」の説法は、人生に起こるありとあらゆる事が、私を成長せしめるための薬であるという意味。それは、聖人の「念仏者は無碍の一道なり」に相通ずるものである…と、住職から法話があった後、癌という病を通して念仏に出会い、本当の「いのち」を生ききった鈴木章子さんの「癌は宝」のビデオを鑑賞しました。

◎年末法話会（十二月十一日）法話 田澤 一明 師

浄敬寺年末法話会にて田澤先生からお話を頂くのは、今回で四回目となり、「存在の大地」という講題をいただき聴聞しました。最初に、先生のお母様が昨年二月に亡くなられ、母親という存在がどんな存在だったかという思いからこの度の「存在の大地」という講題を思い立ったと説明がありました。

大地とは、自分の足元であり、自分を支えてくれるもの。それと同じ様に、母もいつも自分を待っていてくれて、いつ帰っても受け止めてくれる存在であった。大地と母親は密接な関係がある。

親鸞聖人は、親という存在を聖徳太子にみていた。父とは「すてずして」、母とは「そいたもう」存在であると言われました。そのお心が阿弥陀様の本願であり、そのお心を本当の親として、お内仏（阿弥陀様）を家に迎え入れ、家庭を築いていこうというのが真宗門徒なのです。

先生は「何があるか分からないこの場で、どこまでも待ち続け、受け止めてくれる存在に出会う、その場が大地となる」とお話し下さいました。（当院 記）

☆二〇一七年前半の行事予定

一月一日 修正会勤行 朝六時より

一月一～二日 年始参

*真宗門徒の一年は、御本尊のお参りから始めましょう

一月二十一日(土) 歎異抄をよむ会 午前九時～

二月十一日(土) 歎異抄をよむ会 午前九時～

三月十一日(土) 歎異抄をよむ会 午前九時～

三月十七～二十三日 春彼岸

*お中日 二十日(春分の日)

午前十時半～法話・勤行後・おとき

四月八日(土) 柏刈同朋の会報恩講(産業文化会館)

午後一時三十分～

四月二十二～二十三日 柏刈同朋の会研修旅行

蓮如上人御影道中 法要参拝

五月十九日(木) 報恩講お引き上げ 午前十時～

法話(今泉温資師)

引き続き 勤行(御満座)・おとき

「報恩講」は、
真宗門徒にとっ
て最も重要な年
中行事です!

六月三日(土) 仏教文化講演会 十三時半～

金澤翔子席上揮毫・金澤泰子講演会

六月十日(土) 歎異抄をよむ会 午前九時～

六月二十五日(日) 夏の法話会 午後一時半～

七月十四日(金) 盆参会(盆内) 両日とも十時半～

十五日(土) 法話・勤行・おときがあります

八月六日(日) 夏休み子どもの集い 午後四時より

八月十三日～十六日 盂蘭盆会(お盆)

十三日・・・午前六時より 本堂にて勤行

定例会『歎異抄をよむ会』のご案内

*日時 第二土曜日午前九時より(一月は第三)

*内容 『歎異抄』の解説、正信偈のお勤め

終了後、自由参加で茶話会あり

*持ち物 赤本 念珠 『歎異抄』の冊子

基本的に第二土曜日に開催しておりますが、教区や組の行事との関係で、変更の月があります。ご確認ください。

☆第二十六回 晴香の『真宗門徒のマメ知識』

ちよっぴん
解説!

今回のテーマは『葬儀③〜葬儀後の行事〜』です。葬儀について、

- ①「ご臨終から通夜の前までのこと (浄敬寺だより二十六号)」
 - ②通夜・葬儀の準備や心構え (浄敬寺だより二十七号)
- という内容で過去二回解説いたしました。今回は葬儀後の中陰について、柏崎の風習も交えながら、大切にしたいことや「へえ〜」という真宗門徒の豆知識を紹介します。

☆豆知識・・・葬儀?告別式??

葬儀場の案内アナウンスで、「葬儀ならびに告別式を…」という言葉が聞かれた覚えがあるかと思いますが、何か違いがあるのか、また、どこまでが葬儀でどこからが告別式かとお思いにならないかもしれません。真宗門徒は御本尊の元で執り行う儀式を葬儀と表し、出棺に際し、親しい方でお花を手向けお別れをすることを告別式と表しています。

☆当日の礼参

葬儀・告別式後のおとときが済み、会葬者やおとときに列席された方々がお帰りになられたら、遺骨を自宅へ安置し、喪主を中心に手次寺への礼参を行います。

礼参の最重要目的は、お寺からお迎えした御本尊様を送り届けることです。御本尊様は、掛け軸に表具された阿弥陀如来様の絵像ですが、仏様をお連れするのですから、お車の場合は運転手以外の方が丁寧に抱えてお運びください。

葬儀社の方にお尋ねすると、「代表者数名で」とお答えくださるようですが、亡き方をご縁に久しぶりに地元に戻られたご親戚もいらつしやるかと思えます。大勢でお越しいただいても、差し支えありませんので、ぜひ皆様でお参りください。

☆葬儀の後は・・・

突然ですが、3択クイズです。

①玄関前に立てる門牌、真宗門徒のお宅では何と記すでしょうか?
A、喪中 B、中陰 C、忌中

答えはB、中陰(ちゅういん)です☆

②さて、その中陰についてもう一問、中陰期間はどのくらい?

A、四十九日 B、一年間 C、次のお正月を過ぎるまで

答えはA、四十九日です☆

【中陰の間の過ごし方】

亡くなられた日を一日目と数え、七日目が初七日です。

浄敬寺では、

・初七日までは毎日

・初七日を過ぎると、七日毎に四十九日を迎える日まで

お参りに寄せていただきます。

【七日・三十五日法要】

毎七日の節目の中でも、重きを置くのが初七日と三十五日(五日)です。短い期間で遠方から改めて参集するのは難儀であるということから、葬儀当日の出棺後、縁の深い会葬者が揃っているうちに引き上げて行う風習が、柏崎には定着しております。

引き上げて行っているため、改めて法要は行いませんが、毎七日の節目には、ご家族や最寄のご親戚等、ご都合のつく方だけでもお経にあつていただければと思います。

【満中陰法要】

七日×7の四十九日が、満中陰：喪が明ける日です。休日の関係で前後する場合もありますが、四十九日を目処に満中陰法要を行い、天候に問題のない時期であれば遺骨をお墓に納めます。納骨に関しては、冬季は春まで延期されるケースがほとんどです。お気軽ににご相談ください。



☆ちよつこら解説オマケ・・・【中陰ってナンだ?】

そもそも、中陰の考え方の元となっているのは、古代インドの輪廻転生の思想と中国の道教の思想が交じり合ってきた「十王経」。実はこれ、お釈迦様が説かれた経典とは異なるものです。ですが、道教といえれば思いつくのは親孝行の思想であったり、人としてよく生きるための道が説かれていたりすることから、私たちにとって大切な方を敬う方法として現在の風習の元となっているようです。

さて、この「十王経」によると、死者は七日毎に十王の審判を受け、三十五日目には閻魔大王の審判を受けるとされました。さて、生前の行いもマルっ



とお見通し…の閻魔大王の前で私たちはどんな判決を受けるでしょうか?世間の法に触れることはなかったとしても、知らずに他者を傷つけたこと、抱えていた腹黒い気持ち…全てが閻魔大王の判断材料となれば、極楽行きは到底適わないでしょう。(涙)

「十王経」の中では、死後に閻魔大王の鏡の前で初めて知らされる私たちの姿ですが、お念仏の教えを聞くととき、問題にされるのは私たちのこの身が抱えた煩惱や罪の深さです。…ということとは、「南無阿弥陀仏を称える人は既に知っている」はずなのです。

「南無阿弥陀仏」は救いようのない私たちを、救うために説かれた教えであり呼びかけであり、私たちが南無阿弥陀仏を称えるということは、阿弥陀仏のおはたらきに気付いた感謝のお返事だからです。

それが解れば、中陰の過ごし方も変わってきますね。「生まれた以上誰にでも、ある日突然やってくる死」「家族だけでない様々な方との関係性の中にあつた生」「自分に繋げてくださったいのちのバトン」…亡くなられた方が、まさに命懸けで知らせてくださっていること、いのちの真実に向き合う期間でありたいものです。

☆定例会『歎異抄』をよむ会の「報告とご案内

十一年ほど続けてきた『正信偈』をよむ会」を、昨秋より『歎異抄』をよむ会」として再スタートさせました。

『歎異抄』は、親鸞聖人のお傍で親鸞聖人のお言葉を聞いた門弟の唯円によって記された書物で、文学的にも思想的にも優れているのは勿論のことですが、真宗門徒にとって大切なこと、聞き違えてはいけないポイントが記されていますので、御門徒の皆様からぜひ触れていただきと思っております。これまでの内容をお知らせいたします。

＊第一回 九月十日(土)

『歎異抄』を学ぶ前の予備知識・開催の願い

- ・ 真宗門徒の拠り所の経典は? ・ 親鸞聖人の主著は?
- ・ お勤めの際に読まれているものは? などなど

＊第二回 十月一日(土)

特別講座『歎異抄』の学びはじめに 講師・佐野明弘師

- ・ 『歎異抄』が記された背景は?

- ・ 『歎異抄』に書かれた内容とは???

＊第三回 十一月十二日(土)

『歎異抄』 序文 の解説

＊第四回は一月二十一日(土)の予定です。

〜「注意」ください〜

『歎異抄』でネット検索すると様々なサイトが表示されます。その中には団体名を隠した勧誘活動等、社会的な問題を抱えた団体のサイトもありましたので、メールマガジンの購読等には十分にお気をつけください。

☆ 一 仏教名言集 第二十一回

一 『シャカリキ』 一

何かに熱中して取り組むことを、シャカリキと言います。漢字では釈迦力と書き、まさしくお釈迦様の力のことです。説明では、お釈迦様が生涯、衆生を助けるために尽力した力、とあります。ですが、定かな確証はないそうです。もう一説は、お釈迦様の降誕の際に感じた力だとされています。お釈迦様は、生まれてすぐに七歩歩いたと言われています。これは、お釈迦様の降誕に出遇った人たちが生まれただけのお釈迦様から、直ぐに歩いたと思えるほどの力強さ、また自分たちの拠り所になる可能性を感じた喩えと言われています。そこから、釈迦力とは、純粹で可能性に満ちた力とされています。子どもたちが熱中する意味のないような行動に、あらゆる衆生を救う釈迦力は感じられませんが、将来何かに繋がるのだろうか、不思議な可能性に満ちた力は、少し感じています。

(当 院)

七五三にあわせて
撮影しました♪



☆ 編集を終えて：

この度の二十八号より、表紙向かって右側の余白を増やしました。「ファイルに閉じるための穴を開けるスペースがあると嬉しいです」というご意見をいただいたからです。皆様のアイデアやご希望を盛り込ませていただき、毎回少しずつ形式を改定しながら、来年のお正月には三十号で、十五年周年。早いものです。今後とも、皆様のご期待に応えつつ、お念仏のご縁を広めていけたらなうと思っております。

「真宗門徒の豆知識ちよつこら解説のバックナンバーがあったら欲しいです」というお話もいただき、用意してありますので、ご希望の方はお知らせください。

(晴 香)

☆ メールアドレス

住職 tom814@kismet.or.jp 晴香 haru310@kismet.or.jp

当院 minipapa@kismet.or.jp

☆ ブログ

『真宗大谷派浄敬寺 小僧☆はるかのかの気まぐれ日記』

http://blogs.yahoo.co.jp/haru_0310_naga

浄敬寺の櫓、
福島県二本松市へ

